



明星抄

行幸 蘭 真本  
梅枝 藤 哀 栗  
十二





行幸

卷名以歌号之大原野行幸也源三十六歳の十二月也三十七歳の二月までなる也  
也初巻巻も廿六也

くわあーいさあ 玉鬘を源のあがき  
あひららるる玉鬘縁のうらと  
けをさあふれまよ 源下にむげり  
いあーてふふいさあんとのふれふらり  
ああーのくまげあそけ  
ああー 内太君也

ああーいさあ







おのれもいふべしおのれもいふべし  
おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし  
おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし  
おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし  
おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし  
おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし  
おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし  
おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし

おのれもいふべしおのれもいふべし

其はりの 又化者の事いふものおれは

まひぶよ<sup>を</sup>規くちんとする稽よんぬ

いのけいん 源のみれ相

のりあやをひよ 内宿のいふらり

給よ(まゐり)

あひぬの あい〜(かゝる)

あゝもぢ〜(せ) せう〜(あ)

うちきし くのち(い)つた(い)ん

はなり〜(中)さ(あ)は(り)きよ(と)ん(と)ん

に(あ)そ(る)給(り)る(事)ら

あつらふよ 稽よん(まゐ)りの(あ)

きん〜(の)あや 内宿の〜(た)の〜(か)〜(た)ら

あ(あ)い(源)の(ち)してよ(稽)給(り)

う(あ)〜(れ)あ(え)よ 中(ま)よ(源)の(あ)〜

て(あ)〜(せ)給(り)今(い)又(け)内(宿)の(ま)〜(り)給

ひ(て)給(給)勢(よ)電(た)〜(り)れ(給)ひ(て)中(ま)の

内(ま)使(あ)〜(と)

の(あ)〜(に) 実(ま)又(ま)内(の)あ(い)れ(は)の(い)〜(あ)

ら(り)〜(て)ま(り)行(い)て(ま)又(弘)微(ほ)れ(あ)〜(と)

あ(あ)〜(と)

よ(ん)の ち(ま)〜(い)難(が)ら(ま)〜(あ)給(り)〜(い)ん

あ(あ)〜(と) ち(ま)の(相)

らそそいあま 源の海いよさあしよとら  
又たより おい源いりうとらりあまくあれを  
らりよあまうらうのあまあまあまあまあま  
さそ又あまのあま

あまねます ちよよあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あまあまあま ちよあまあまあまあま

あまあまあま ちよあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあま

あどろそとり 親あどろそあひのたのめしん

はうゆひ 男女あはれ之内大臣(すまみ)あ

<sup>朱</sup>え<sup>ブク</sup>脈の<sup>カ</sup>冠乃<sup>カ</sup>ご

大まこそれをつこいなり 内大臣<sup>すまみ</sup>あ

いふせま

はあ<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>か<sup>あ</sup>よ 玉<sup>たま</sup>舞の<sup>ま</sup>祖母<sup>おば</sup>なり

こ<sup>こ</sup>条<sup>じょう</sup>ま<sup>ま</sup>よ 源<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>条<sup>じょう</sup>ま<sup>ま</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>給<sup>たま</sup>ふ

今<sup>いま</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>て 源<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 南<sup>なん</sup>白<sup>はく</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 源<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ん 女<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 源<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 女<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 老<sup>らう</sup>病<sup>びやう</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 女<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 女<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 源<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 源<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 女<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 女<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 今<sup>いま</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>て

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん 内<sup>うち</sup>大臣<sup>だいじん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん







さらやう侍り 源乃相

大文の由又あり 大まより源れとくひより

の一はせうそい侍り

六条のあし 大文のふれ相

あふりか 内方にれち

し道がくしてさひ 夕方のありしつらてもさうり

源れとくひより

しそひおちあつてさう

又あしつらめ またあつて源れにれ肉入

はれ源公らせあり

つげさら 人へ也

あつてあひて かねあひつら

あつて 朱 宿植源公とつたの世よつて

煙り今の世乃光華あると

あつて 安らふと

えひそののほしめ 直衣布袴とつら出立

あつてあつてつらひ けしあつてあつて

あつてあつてつらひ けしあつてあつて

あつてあつてつらひ けしあつてあつて

あつてあつてつらひ けしあつてあつて

あつてあつてつらひ けしあつてあつて

あつてあつてつらひ けしあつてあつて



お前の口をよす 書并なれば

うたかた 由緒の無りあたるおふ

いふおふおふ 由緒の無

あふおふおふ 海舟相違書

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あふおふおふ 海舟相違書の

あつた物々 けつりの字妙く今迄の  
冬とてひなをなれぬの今更より一  
一馬と嬉しき事なり

ひらりのきつとひのあつる ね分の目だあ

一やうにひなをなれぬ

のしほをたへん ね分の目だあ

ね分の目だあ

それとあつるまへ 夕暮の雲はつる

三葉をふり ね分の目だあ

あつらんや ね分の目だあ

かたしそまゆすゆ也

あつらんや 命長きたあ

あつらんや 昔は孫なるれ

あつらんや ね分の目だあ

あつらんや

二つに ね分の目だあ

ね孫又孫のほ子とくも夢へのま

是も又孫のま

あつらんや

あつらんや

あつらんや

あつらんや



世をうつらぬ

君のまはる

朝暁

うららかなる

あはれ

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま

あはれそふれぬま



とくしつりてぬのさくしつり

ふじりたまひ 今迄為新のぬさくしつり

とくしつりぬ

みくしつりぬ ぬ

ぬしつりぬ 昔の交際を思ふ

中納言 中納言木

人三つりぬ 見せよとてふ

しつりぬ 又実のさくしつり

嬉しくしつり

さ海しつり 今迄為新のぬさくしつり

ぬさくしつり

中納言の 秋好し

おしつりぬ 源内大臣へ

初め

とくしつりぬ 内府のぬさくしつり

ぬさくしつり 衆善の禄例より

うらやみぬさくしつり 内府のぬさくしつり

ぬさくしつり 源内大臣のぬさくしつり

ぬさくしつり 源内大臣のぬさくしつり

ぬさくしつり 源内大臣のぬさくしつり

ぬさくしつり 源内大臣のぬさくしつり

ちいなるまゆ (ちいなるまゆ)

あいらい (あいらい) 源とゆたはる (源とゆたはる)

あやあや (あやあや) 奥とよ (奥とよ)

中 (中) 拍子 (拍子)

きりぎりす (きりぎりす) 二方 (二方) とも (とも)

あなう (あなう) へ (へ) とも (とも)

な (な) の (の) とも (とも) 内 (内) 結 (結) の (の) とも (とも) 関 (関) あ (あ) ら (ら) 中 (中) の (の)

弁 (弁) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも) 朝 (朝) 呼 (呼) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

き (き) り (り) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) の (の) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

あ (あ) ら (ら) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも) へ (へ) とも (とも)

いひなむとていふ

いひなむとていふ

いひなむとていふ

いひなむとていふ 内 存 ありていふとていふ

いひなむとていふ 多 少 ありていふとていふ

いひなむとていふ 内 存 ありていふ

いひなむとていふ 師 統 秘 之 念 路 ありていふ

今 案 び べ べ の こと して 正 統 元

人 の お や ち ち へ 多 少 ありていふ

いひなむとていふ 多 少 ありていふ

いひなむとていふ 中 人 の 言 語 ありていふ

いひなむとていふ 世 人 の 言 語 ありていふ

いひなむとていふ 多 少 ありていふ  
いひなむとていふ 多 少 ありていふ  
いひなむとていふ 多 少 ありていふ

蘭

源三十七八月九月の事也物語少の二月より

五月月の事もえび

内侍の事

お勢内侍の事にも物語少

あへて書をさう内侍の事にも約千の物語

りみえり

これむく

源と内侍と也

おもとよひ

お勢の事中也源の事には物語

およりおに

お勢内侍の電テラもあつた

事のある事

らるる事

たましく親しく事なれりて



内よりおかせ 内より夕暮をに使とて深へ  
 口をわき其由を扱つ玉うらの成るなり給ふ  
 内より 玉うらう源(のぬき)  
 此時分のあゝ 玉算と夕暮を給ひひ  
 うそあつすらお 実子にとりていあなり  
 じしあゝくちあぐくすひ給ひ  
 頼もあゝらきひて 夕暮りれ昔あも  
 ぬをれはく 夕暮りれ昔あも  
 さりりるあああ 朱由門とよまはあゝのそ  
 一とせおあゝをを弄云源成と玉うら  
 とれきあなり

あゝあゝあゝあゝ 中々あゝの成るやう  
 らゝゝゝあゝあゝ(あゝ) 夕暮のしらのあゝの  
 人よあゝあゝあゝ 夕暮のしらのあゝの  
 られあゝあゝの あゝあゝあゝあゝあゝ  
 内よりあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 内より 玉算の給ふあゝあゝあゝ  
 くとくくあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 此月八日あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 あゝあゝあゝあゝ

シラヤ  
十三日

あゝあゝあゝあゝ 玉うられ給

けはくしめし 今日有る実をばいふに小葉  
 の正態をわらふにふらふとく(おまのりか)の  
 ことさう おまのりかのあはし  
 ぬらふと 中おらぬびらぬ物と(おま)の  
 があ おまのりかとて今うらむれ者あわむ  
 袖を吹風おけ絡勢也  
 さしめあやう おまのりかの  
 怪胎を母一やうにふらふとく(おま)の  
 けはくしめし  
 何れも 玉葉のむらさきと別あはれ  
 ぬましとてふらふとく(おま)の

らたの花 らんまに花中異あり拾遺シラノイゲヤウも  
 物あはしむとてふらふとく(おま)の  
 あらふとてふらふとく(おま)の  
 おまのりかとてふらふとく(おま)の  
 兄ケケイ弟ケイとてふらふとく(おま)の  
 をいふれ  
 うらふとてふらふとく(おま)の  
 一箇のりかとてふらふとく(おま)の  
 あらふとてふらふとく(おま)の  
 ずしてとりかへし何れも

あの一舟れ なるし葉文の正船と申一やう  
に美路のくよき(者)がうまの者夜の縁のりうい  
とて物言(言)の家のちいこひんりこまを  
なれそちる 別後——

熟めらる けしきもさの葉の面白れお警方々  
あし程もい見せしなれは回船とてお程の  
なれそちるいおちよなをい程とていよ  
あ一舟とていのれらるい文の美いおうい  
夕暮とれおを結ぶぬれは見せしああうい  
けしおれ(言)たれとてはらうふうそくといま  
あれすういひお程のゆりういぬく——とて葉

さいころを也

あしきのぬいもの 夕暮の廻(お)ういれ  
けしきもさの葉のちいこひの程のりうい  
まのよまのれらるちいこひをい  
えちりあ まいよおしよいおれ(言)  
今とい おふういこひの葉のりうい  
あまががた(言)くしよのあしこ(言)  
あちお 柏(言)  
くのうい——  
うい(言)らる(言)れらる 他若乃相(言)  
かんのあ ちめそくのあとちり内(言)の(言)



ゆるはの香色うま

夕霧のち

いりたるはひめれ

奥へ引入りて

の今すうまけりて

はな

あまうまうり

源のほ

はな

あまうまうり

ひな

源の箱

ま

念は又

ま

夕霧の

して

ま

中へ

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

の如く 又らかゝりの引ね路より其の如く  
かゝるなり

人々 其の如く其の如く其の如く其の如く  
文仕の 慶義一としての如く

くよの 又其の如く其の如く其の如く  
色比 又其の如く

ひさし海 其の如く其の如く其の如く  
の如く 内大臣

ちねれあゝいん海 其の如く其の如く  
又かゝるいん海

源の如く

はかゆりて 実父の許キヨダクに去るなり

女三子去るなり 礼記に婦人の後人者也ル

別後父兄嫁外ウケ後ウケ子コ 註云従トハ  
親順其教令ニ云々

いん海 今内大臣の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く

うらぐも 内大臣の如く其の如く  
なり其の如く其の如く其の如く

えそのすちの 其の如く其の如く其の如く  
あがし其の如く其の如く其の如く

おがそのの文社

うゝ文社よち一給ゆわのむ

舞方のちるぶとく一にめて一給ゆわのむ内古官がよ

あこの給ゆわ

らうらう 牽籠(牽籠)と籠(籠)一入(入)獣(獣)と牽(牽)

よくわがぶらぶら

あこの給ゆわ

あこの給ゆわ 曲(曲)の直(直)よた(よた)

らうらう 肉店(肉店)ちるぶとく(ちるぶとく)のむ

あこの給ゆわ くら(くら)のむ

あこの給ゆわ 夕霧(夕霧)のむ

うゝのむ くら(くら)のむ

あこの 八月(八月)

月(月)のむ 九月(九月)のむ

肉(肉)のむ 肉(肉)のむ

あこの給ゆわ

あこの給ゆわ

あこの給ゆわ

あこの給ゆわ

あこの 夕霧(夕霧)

あこの 夕霧(夕霧)のむ

あこの使(使)て 肉(肉)店(店)の使(使)て 肉(肉)店(店)のむ

あこのむ 肉(肉)店(店)の使(使)て 肉(肉)店(店)のむ

あひねり

あひねり

あひねりのまらり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あひねり

あま海よりとま恋よよせしる計に在るに 御乃  
御代をよみあひらすら磯のそとよあひしんよ  
のこころとらるるあふ二を移りけ他例可成  
すくよふ

まといきり 何れよも恋ざり

をのつら 幸おれそなきらぐ 疎をよそ

あつとふかき

りなるお 物木の相

らうつり せられあ

大船は中お 大をちおかそ中お

くくく 大おとら

あおく 係

さうやうあはる 係れあう

ゆえの歌推也

或る けあとの見中

六条のあ けあは姉大おのちまをれが

是ををのけしてらうと係らるる

れあ 実

あまは むらうのち乃中さはれあ

あまはらうとらりやあ

あがとの 係

弁のあ けん大およあをせあ

このころ 八月のころ

教あり 昔より教ありふれ月かんれひ月な  
まばいしうしをけ月さひゆありけりよ  
かよのあつ月よふかづて一筋よりそだり  
月ころ 十月よりありけりゆりよよま  
孫ありて

いふのよま 文はよりけりよ

朝日さす 即ち教ありたまをけりよ  
るのよらくころひけりよとふありゆり  
ひけりよ天類よあれくますしんされど  
朝日さすえとていふのよまがけり

そいふよまけりけりそいふけりけり

いふのよま 藤をよりありゆり

うらありてや 女方の使のけり

或るのよまのころ 是も玉撃よふける

人よまを始てなまの持りけり

まじりてん 朱のめり面をいふ義孝奇

と柳のころのよま

ありてえぬ 由ありけりありけり

この絶ありて今とありけり

まのけり 昔のよまのけり

ありて 昔のよまありてありけり

用 下 十

是必日よ向ふ物之備是とて勢とたのちなる  
 物之なれどいさよ向ふとて霧とてえきいさなる物  
 也其下とてむらうのまはよ也むらうのまも昔とて  
 うなる事とていさむらうとてむらうとてむらう  
 表とてむらうとて昔とてむらうとてむらうとて  
 をむらうとてむらうとてむらうとて  
 女はむらうとてこの君とてむらうとて  
 のちむらうとてむらうとてむらうとてむらうとて  
 次もむらうとてむらうとてむらうとてむらうとて  
 積りてむらうとてむらうとてむらうとてむらうとて

真木柱

卷名以歌号之 源三十七九月より三十八の  
 秋迄此事も但まに十月よといとありきとちこ  
 次とていさむらうとてむらうとてむらうとて  
 内ふまむらうとてむらうとてむらうとて  
 りむらうとてむらうとてむらうとてむらうとて  
 ありんよ 海はむらうとて世界へのうとてむらうとて  
 どもありとてむらうとてむらうとてむらうとて  
 物なれと ちむらうとてむらうとてむらうとて  
 のちむらうとてむらうとてむらうとてむらうとて  
 へとてむらうとてむらうとてむらうとてむらうとて

とほまゝに 大おのちをくお舞のちよけんを  
能無るをまよふことなれとておひねり  
かまれ せうくありあふくもあひけりなほ  
ありあはれもなれたる利  
げよそこころをくらう

おあきれたん 河海よまを海にんといはせ  
そとらるるありのこれの西のあひのあひの  
中世のあはれお物のまをまへくおりおひ  
しとどのまはるるもありになりをなれたる  
けのあひおまをなりにあひせむらうのあひお  
りけりあはれ早く成就するありまはむらう

おのちをく人なるありし利まよすまを  
となりけりおのちをく人なるありし  
けりおのちをくまはれおのちをく人なるありし  
事なりけり人なるおのちをく人なるありし  
るおのちをくまはれおのちをく人なるありし

おのちをく けりおのちをくまはれおのちをく人なるありし  
ていなるありし  
あはれおのちをく 実におのちをく人なるありし  
あはれおのちをく 大おのちをく人なるありし  
あはれおのちをく 大おのちをく人なるありし  
あはれおのちをく 大おのちをく人なるありし





多れゆゑに海 出づるの音もなまはらじ

後もいそげし 海人の疑ウタガハシも今げに

海人のあられぬこと

うらつひよ 打つひよ海人の海にせうて

キナヒ 極つまひつれあり

今更り 海のうらぐせられん今よりこそなる

なれつれと也 兼 箋日人のくらせとは大船の

事成りくらせとはれんある人多く

け物語りうらひなり

大船のあらしぬ 海人は出あれ也

きつーし物 とうつーし海也

すくよのあはれ け物大船よあつひて今海よび

ふは別れのおもひなり

よそにうらみあり 海のえあり我物よしめ

い海し物なり也

ありとらて 一二百源乃実り船よをさうりも

飛て引海も船のゆいありしと海人の三遠ミト

されど安んず只何と見えし物也

あつひの 奇何是しとる也

うらむ海 け物のあはれもあれど是らありし物

舟にまはりのふれ出来ざるはしるし物なり

よい海は船のまはらざるはしるし物なり



わが家にもうございせんち居の又ち居のござい  
ゑうも おうござい

うゝあらんさ ちづるの故きへまへ

うゝよ ちおのちへ 誓河のま 田ぶがぢぢぢぢ  
あーあらんさあり内侍のま かくの必拜賀よ

新しきまへ

そつあそよ 糸田あははすぐんちおの亭(後  
せんさむわれんまもとあひありけつる

あれ方 ちおの中きへ

あよひのふ ちおれまへ 共實あちのち ちけん  
くああはへくまへまへまへまへまへまへまへ

あたり

ひしちのむい 一方むいあり

あそんまへあり ちおのをまへ

あみこ 糸田の親まへ

あひこ ちおのちよ 係小窓海と ちぢ  
あひまのちまへまへまへまへまへまへ

あひまのち ちおのちまへまへまへまへまへ

あひまのち ちおのちまへまへまへまへまへ  
あひまのち ちおのちまへまへまへまへまへ

あひまのち ちおのちまへまへまへまへまへ  
あひまのち ちおのちまへまへまへまへまへ



いとねらげよ めはちねのそねあはせ方冬朝  
舞一のねよとさひまふ

ゆれえちね めのきいたねのほ方れぬ房

中ねのや方にさめゆふ人ころがれもちねのふ人と

あつゝゆ ぬの方れね我方のゆづりそら

あゝそふふあはれはらぬ人のねあふりとなり

あはれゆゆとらうくと ちねれね

玉のうそあま ぶらうとせむらんとあり

ゆゆとて ぶらうとせむらんとあり

まゝませとあり

人のねつゝとら ぬ方れね

たとのぬ方方 ちねれ

く人の親とら ぶらうとせむらんとあり

いばあはれとせむらんとあり ちねれ

ちねれ

あまの 何ともあまのいそえとあり

ゆてまら ちねれ

いそやう くのねとせむらんとあり

いそやう

あまのぬ方方 ちねれ

ちねれ

めれとてそふあはれとらぬ人せむらんとあり

し終つれはすし人れうとものゆらうと終  
行よしととと

人のいあやけあく 或るまゝあきり

くれぬまゝいあをえ 大ねむうとれ出さ

あり終つてはれあなり

けしうととと おの方たす

びえ火 何海うとみえとら

うととととととと 格子もあよられ也

とあうとととと

今入路り 心をあり云うひあつととと

ととととととと

うあふいととと 大ねの箱

あつとととと 源内と居く

立とまるととと お方相く

あそとととと 面白と書と海く

神のあも 是いつとね春くにあつるをたよ

無神れ水のとつとととと

とつととと お方く

あつととととと 海也

あつととととと 男とととと

中ねのくすと表のよや ちとととととと

にふせそ私のもれとととととと





ゆけのしれきあまはあまのりくすけしてまじ  
あまのりくすけ

情なきは 是の情あたまのりくすけの神し  
うまの事な ちおの海あま

ちうきん ぶらうのあまのりくすけ  
佛の中らあまのりくすけ

一教んりの ぶらうのあまのりくすけ  
ちの文 或るあま

人のいんそん 是のあまのりくすけ  
あまのあまのりくすけ  
あまのりくすけ

えさのり ぶのあまのりくすけ

みおのり 海内あまのりくすけ  
いさのり

昔物語 伝昔物語彌女河子合はさの  
と継母のそふよりてまろそんあま

あまのり あまのりくすけ  
つてあまのりくすけのあまのりくすけ  
あまのりくすけ

あまのりくすけ 娘あまのりくすけ  
あまのりくすけ  
あまのりくすけ

傳れ玉うろの首こそいささか行なれに  
なほうら何れと

ひんご色 かつまの箱の色よませり

今んとて 長るるまは是より持箱のまとなり

あれとて 箱のまのののぬれよひ装束

のあり早のげ履どりにあつていぬりてい

ぬきよとあり

あさなれと なるれ水の中おありけりなる

いさ懸と影りよせり

ととくも 我のあつは魚とあり

うらめまてそ 文選別賦は視喬木於古里

せりり髪がすむ宿れ指爪はくもくは  
ととくしゆりしとや

あつは 又二衣りのまふくもあつは

あつは 是より或る方のあつは

いしり 一夜姫要してはあつは

あつは

母水の方 けあつはの徳母あつは

あつはの書あつは

あつは

あつは 秋好申交をいぬせりて或るあ

のあつは

中のねとさうり  
 事ぬり信人よおのまゝなるはつたはる  
 のまゝのねとさうり  
 人のりな  
 とてさうみぬのまゝなるはつたはる  
 并見皆列士とこそさうり  
 すりあるまゝ  
 海をいぬりのさうり  
 ふう  
 不幸  
 海のりさうり  
 海雲のありさうり

りあゝさうり  
 えのそ  
 きれさ  
 あゝさうり  
 正徳  
 まり  
 あゝさうり  
 ねのまゝ  
 よれ  
 海雲の  
 ありさうり  
 ちねのさうり



男たうう 乃物ぐさう也

ふくのやうに連 係内をたう

宰おちぬ 夕霧

せうとれまんら 物まをさう

兼書後 宗宸後の後よ仁書後ありさうじ

ろふある後之發思の姉れ宿治つる也

西よ文の女流 南代の女流或る文の女流

此公の肉ハ 玉うらうらうと今公のつてたわう

まこと弟の能とくうらりてさう

とくうらうらうと 南代の女流をさうあり

皆中文女流をさうけまう

中宮弘徽後 中文の秋好弘徽後の内書後の

ひまめけ文の女流或る人のひまめ兼書

後れあうり作の女流

たのら後 乃書の思よりたのら乃紅梅の

書の思よりたのら

中納言宰相 けあ人系圖不載

ま書文の女流 朱草院の女流松原の妹ま書

乃母をさ

ま書文の女流 乃母をさ

せとも母女流のつる色かのあへん

とくう 有界

ひろひ版 尚版所より

ちね後のちねえ おふ十むらりまそなせ

のーあつらんまり

よそんと 何も御舞のよそんよ抱せし

けつつかひ せうくのほ肩じ

きりしんすまひ せうくまふりめい

きけ終内<sup>ウチスミ</sup>修してまじしんめいせうく

げんいあまいさく ちねの

ぬよあつり

宿直<sup>ウチ</sup>より ちねの

あひ事<sup>ウチ</sup>成 せうく入下ぬめ

きあふんてそ

わたりよりほせいの

ゆだりりあめえ

ちねの

ねんーわまりて

きんたふんあきせ

それなりとそ

ちねの方よりとせぬひて

こふまよ

めい字のちねえちねう

ーまふよと

まいつる声も

あつらうりつるまの

あつらわれとの我そちのち

うんせ

けつつかひとせぬー

けつつかひ書さ海

ねんてん

ねんてん海の



うらうらも けんたよ我れもの可なりとて

てんてせ

又あし 肉ちん

さなめのこり 勅定

人よりさたり 勅定

昔のあし どもくつものふみぬき

どとあつ平貞文がまのあまみこり

我れとれと どもれはを

れちん海 肉のこり

こちん海 海肉ちん

こちん海 出籠ちん

西のこり書

九字より せんちん

ちんちん

おんちん 私三光院自筆

あしとちんちん

けんちん

けんちん

てんてせ

あしちんちん

けんちん

作のちん



なほりん 玉うららのあがり香びりなりま

づふますれんそしぬひそしちのち

きついなめ 不き思也

女もはやく ひとあふんちのくちま酒の

煙のは焼始風さつこさめうふくまはま

めすこりて ちねのち

うみま 或るのま

くさあめの びろくはま

くあめくわら ぬだうれめらとまり

まらうらまらしよま ちねとますくう

わくは方のなだ

まいて さらた海をいぬいぬい

いそらまゆらん ちうまゆらん

けんりも ちん

うめすり ちんちんちんちんちん

みえうらわよく 督司のち

わやくしん 敬

のさのちけて 彩の糸とある糸をねえ面

白さの書いぬ

昔れんのそ 勝月夜すうそをれんそ

おはやく 勝月夜も内信のこむらうも内信

也宿世のちん

何れありあり

是時よありありありあり

晴るるありあり

今も何あり 自今も何事なくあり

ついでとあり

さあ一晩 さいちま守あり

玉りありあり けりやとすむりあり不審也

とある一しありと引とられても又ありあり

ついでに何ありあり 後漢杜詩傳將帥

和睦士卒島藻注言觀悅如鳥戲水藻とあり

けいありありあり

ありもこれあり きてさいわいぞあり

口もいもいありありありありありありありありありあり

けい志進ありありありあり

れありありありあり

書のことと打控て 西れ討人ありあり

美竹のませ さいのありあり

るよありあり 何ありありありありありありありありありあり

又續古今ありありありありありありありありありあり

よ衣衣深てこれありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありあり

ありありあり

るよありあり 面影よありありありありありあり





るるるるるるるるるる

梅枝卷三十一

二十二終

梅枝

卷名以詞号之源三十九歳正二月之事也

此書之のり ぬえ申文十二歳なるりづつ不

れあてゑの十二歳よりしてのむらひのりあぞ

へいひるや

善きもの 今となりの十三歳あり

大屋ひとらう ちやねとのあゝ陸あつは也

大武 大武大武一任五年中くあゝまれ

ふありされが源平の巻よらゆ大武よりのある

づゝのりつれとのそ何きまゝると云ふも何のあり

朱 三光自筆の細字に書也大武と必潤色ツルシあり

明 梅枝三十一

みはまをぎやううあ〜決をする例なりは帥匡房  
のほまびふた字寮の十摺圖とまきしき  
れいし〜のよし 新法の香具光し

古鏡のほせれうめ 湯を鴻臚館よおせ

一時をり〜物とのあらう

ひらんさ 金欄をどれ敷なり朱被今綺と書

けなれあやうす物 大武のなれつ新法の物たし

ううとも 沉香し

ニくさつ ぬあ〜いあ〜い〜らして薫物か

合せ路ふなり

うらひのさやの 水元服は裳よのさやの

そうまはほのめ 仁明天皇のめあひ

みえさり

さうのやう 路方が侍候し不徳男と云制

禁あるはいと深い侍人ひか〜んとさり

あし〜めて 一服と執〜路め

うへん はあ〜

とるありのそ 花をにき〜本物のあひり

小寢殿ある毎分の中とあ〜ら〜しては娘と

立ちのりあり毎分の中とあ〜ら〜しては娘と

な〜ら〜ら〜と〜云〜晴のあ〜

八条れある ぬあ〜みえさり



紅梅ささぎ

ゆるりれ鏡下掛

何より侍らん

深の箱より花ぐん枝よけえ玉

花よなり

花のえよ

人れがらめしうむじいあふおにれ

しむい物の白くむらえんいむあーかいたなり

うりそあふうあひん物へ事おひいのち自由人

しむいむらあひん

あひん

あれ本づらぬりおふう

いあを懐てあついかぢあひん

あふ

深の箱く薫物あうせきん

何れよりいんくーたおあれいあふおあひん深の

しむいあひんはくーゆりおん

しむいあひん

深れ早下の箱くけぬる

あふのさくけあひんゆりくあひん勝

あひんあひんあひん

あひんあひんあひん

あひんあひんあひんあひんあひんあひん

あひんあひんあひんあひんあひんあひん

あひんあひんあひんあひんあひんあひん

あひんあひんあひん

あひんあひんあひんあひんあひんあひん

あひんあひんあひんあひんあひんあひん



さくらさくあつた  
あつた梅枝一輪(あつたさくら)  
あつた梅枝一輪(あつたさくら)  
あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)  
あつた梅枝一輪(あつたさくら)  
あつた梅枝一輪(あつたさくら)  
あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)  
あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)  
あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

あつた梅枝一輪(あつたさくら)

とまてくふよめる

梅花荷葉菊花落葉

とまてくふよめるとまてくふよめるとまてくふよめる

あれなり

とまてくふよめる

朱田記

とまてくふよめるとまてくふよめる

とまてくふよめる

あのみきいれん

とまてくふよめる

源の相何

とまてくふよめる

源代あ

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

朱見系

とまてくふよめる

朱見系

梅うえ切し

け巻のふきよ

とまてくふよめる

拂れ

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる

とまてくふよめる



を古くは綿を巻いて纏うるをういふなり  
るよむかひの糸よしむすむすいりくくく  
幾ひの糸とさるよ結叶くうきく未幾日おき  
る葉巻よちひまぬけけ何れも方とさるい  
又るたひのよ 我家の政も又なる人として  
まがり糸よとあり

うておのけよ

秋好の坤トシキの夜あり

あれありま

中交ナカマ

はくわけの内信

髪上のカミノ

交りこと

中宮の糸よ始て糸あり

ありま

源中交の糸よ

後の世

中交の折マキ格あると格代の例なる

うてとちありく糸ひゆるしあり

糸よ

ぬえヌエ

うはちの

糸或アウイト

より

ち方の糸よとありはちの糸

糸糸の及びたり

ちぬ

糸圖イトよあり

けね

ぬえの糸イト

糸イト

中交ナカマ

より

糸よ糸よとありはちの糸

はるの糸あり

あつきの秋の 昔の御筆だつりよみへ今の御筆  
うはあつきの

とまりて 和よりてありよふ御筆だつり  
てと云なり

女もよ 今の御筆

中宮此母ますお 吉原の御筆

くやーいよよ 和息お入御筆

和の御筆

和もあつきの御筆 吾母をうりつきの御筆

あつきの御筆 和の御筆

あつきの御筆 和の御筆

古入屋の文 和の御筆

よんごの御筆 和の御筆

院の内侍の御筆 和の御筆

あつきの御筆

くはえと 和の御筆

あつきの御筆

あつきの御筆

あつきの御筆 和の御筆

あつきの御筆

あつきの御筆

あつきの御筆 和の御筆





解して是のつめ

海入まのせ給ふなり

どんかこがと城

こころの宮子ぬたこたす

こころの量キセウあり

女子のどめはつとまへん

一に今雄志れ由るよままのちかひの

侍候より此中

源の返報

と申下

此次平の日記

鎌倉より次平明志の返書

うせされしはそ昨日記ありあり

雄志 ぞ弁る

此人の由色

夕霧こそすこその給ふ

あまれり

人志あり

人れを後悔あり

一こよ

夕霧のどが汁もええあり

いふあり

こころのつとむる

内志居の由公の

こころのつとむる

清くあり

お位すくせとら

おこり

源の夕霧の結信

これあり

雪弁るれ

右大臣申勢

皆系書よ

おころのつとむる

源のつとむる

こころのつとむるの由乃由教判あり





らふせま—— 由た良のふらりすみそもさぶ

いひうしなり

あや——く ちんびなる後とあり

あやあり 夕暮りの文也

つれなきふ 雲井の居れつれなきふのつね

すーある後らりうくつれなきを露も志事だ

志こひまよけるふがうさる我方のてくぬる数

みしむま——しつなり

赤色汁も うこもよやうるふよけ中務かた

の方より舞えぬふしこむ傍<sup>ウラ</sup>瓜<sup>ウラ</sup>むの字は

あぶら<sup>ウラ</sup>舞<sup>ウラ</sup>舞<sup>ウラ</sup>のまむのうをわれめ——ぬらる

あや——しむらり

うこりとし 夕暮も世れ人のあやとまを

とあやをあや——と けねまていふやうの趣乃

あやのいあり——あやのあやと夕暮のふ

み不審あるげ中務文の事とハ知ぬらるれ

あやのりとし 巻く此舞の相違うこれ

と——

藤裏葉

卷之名以詞号也源三十九の春より冬にむすり  
 けりそきの終あり 此書モガ 此事のめふ中さる  
 宰相中ぬかあつめうらよて き井原のゆあり  
 ういあやう 夕暮のち中ありうくあなざら  
 にあふうあうば内大臣の退屈ありてあなざら  
 あうさうゆう 終ふては内大臣の方  
 よりあれあうういあうとけり  
 けりこのすめ 梅がえの巻より内大臣此の終  
 ひ一事たり あなづき  
 けりあも 中務交代夕暮は常色ぞと

明 藤裏葉三十三

竹のしずみあり

我れ方と海　夕暮引くくくつていそ井原の

うれええううくくつとなり

志のゆとすれと　おに夕暮家海の中也

れまけめくす　内大臣此か

うへつれあきて　内大臣と夕暮と足親

あぐくけねえあつれり

三月廿日　南老と系太文の三月廿日と

誤あり家とて思えたり

極あり　河海は見えたり伐く標家の墓

古今深草北山とつりぶふそとと積るもけし所

あり古今内大臣けあへあり終ふなり

けあへとけ　を井原のうらな夕暮此を

とげざあなり

おののきよりん　朱鳥といゆまふいふと

竹のああり

よろのをえりちて　おね母のゆりあれなり

えとせめたり　夕暮の志やこれのみ

えとせめたり

おののきよりん　内大臣の相あり

とれ此のり　船毎のゆり伐き進めたり

我をば余あり　おののきとけしを

のふりつにあり

ころかこまりて

夕暮ちあり

色にけをりしけ

夕暮れちありけのちあり

夕暮れをれこしつゆのちのちあり

とありてこし

夕暮れちあり

夕暮れちありあけあつと書てあつとあつ

夕暮れちありあつとあつ

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちあり

夕暮れちあり

夕暮れちあり

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

中へよ 夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちありあつとあつとあつとあつ

夕暮れちあり

さしすすみものー ーあひうりすみやうに

こそあれとなり

さう一方のきう 大まの敷別ありー後を

まて終んで不孝うりまのーよ今まのを終り終

え孝まのむりありとなり

の終りゆきとなり つかよ内を居まげ終りまて

ゆきの終りし 夕暮れ相ありちりまうありえ

とらう相よくれり

わきと 源の相し

いゝあんと 夕暮れあり

を源しえ 源乃相

北条様 三徳中おまど此終りそあれ今え

二あひの色こまてし終りまうとなり

中おをけい免 乃中おあり

ねんうりすられ 夕暮れ

くれん 源あり

こそれて ぬんやまてい源あり

色こまて

け花のひより 者を絆しつる画あり

月をさう出ぬれと あまの月一日とあれま

河内ごの終りの沙汰ありされど是の七日なり

まよみえうり二日はとる画あり

みろりろく志丹志ろく 夕暮に志おけり

さゆこらりて 夕暮に志おけり

さゆ末の世より 内なる相

よこひありあらん 我身とて終りたり

又籍もと家礼 あゆみみえり

又子の孔と傳人よりと用ふるわれぬ我身

男をれんととる所もをり

朱 史記高祖紀單父人呂公善沛令避仇從之客

因家沛焉沛中豪傑吏聞令有車客皆往賀

蕭何為主吏主進令諸大夫日進不滿千錢

坐之堂下高祖為亭長素易諸吏不持一錢

謁入呂公大驚起迎之門呂公者好相人見高祖

狀貌曰車敬之引入坐蕭何曰劉季固多言少

成事高祖因狎侮諸客遂坐上坐酒闌呂公曰

固留高祖竟酒後呂公曰臣少好相人多矣無如

季相願季自愛臣有息女願為季箕帚妾酒罷呂

媼怒呂公曰公始常欲奇此女與貴人沛令善公衆

之不與何自妄許與劉季呂公曰此非兒女子所知

也卒與劉季呂公女乃呂后也生孝惠魯元公主

文籍もと家礼とらりたり也 箋曰は後漢

の公もあけりと内なる夕暮の寔にたの人のを

をとして漢の祖より比してけ相あり内なる

舅叔又なれば父の名をありあがりてを力敷くも  
あゝぬ家礼今イの初へのことす。此吾母とては極過  
て夕妻汝等重致し一妻礼の多るをたをうられ  
たけ過へハ礼を却ぞとありてはは述懐乃初也  
裏いせ升る汝内た居の許容とぬあゝあゝと  
家初の美と降し給ふ初ありては礼呂た居と共  
又呂た居る初よあゝあゝあゝ其母の呂媪憐せしと  
そ又怒て見女子の志るあゝあゝとて汝に言  
初よ妻ありせしけちるやとてあれ初なり  
室升るの夕内た居は許容ぬあゝあゝあり  
やとてあゝあゝ不致んけ初汝たおお慈とす又

け奏の奥よりこれ林たててを室と号するのり  
く人乃そ号する初監觴ありけ首凡とて  
今此初ありて可し

高祖紀云六年高祖五日一朝太公如家人父子  
禮太公家令説太公曰天無二日土無二王今高  
祖雖子人主也太公雖父人臣也奈何令人主拜  
人臣如此則威重不行後高祖朝太公擁篲迎  
門却行高祖大驚下扶太公太公曰帝人主也奈  
何以我乱天下法於是高祖乃尊太公為太上皇  
注 蔡邕曰不言帝非天子也

索隱曰按本紀秦始皇追尊莊襄王為太上皇



有故事矣蓋太上者無上也皇者德大於帝故尊其父號太上皇也

あふりこれごとく 毎年の儀も此の是の只儒道乃事なりと記あり

いさうをたやま 肉土居の我らまをたやま 此の物事と記あり

いさう 夕暮の朝なり 昔よその人 右敷仕の是は古文書と記あり

いさう 肉土居の時直よりきなり 肉土居を忌は身を控していつふ一となり

いさう 夕暮を饗養と記あり

右のうしと 肉土居朝 三光皇業 河内書目よの右の

いさう 我ら此のうしと記して是も我ら此のまん 毛并居のよと記のめらな

いさう 肉土居はあよと記あり 咳と守と記よ 肉土居はあよと記あり 我ら此の

いさう 肉土居はあよと記あり 我ら此の 肉土居はあよと記あり 我ら此の

いさう 今日此事に終宣ふよ 肉土居はあよと記あり 我ら此の

いさう 是も毛并居よと記あり



花はげの あいなるしらむなり内を居

のゆりしほくはまきり

杉り契れり 面白きいぬ春なり 六帖 昔の盤

有り杉は契連房者あれをのつ比とう花

笑げれ

ねむれいさや 乃中ぬい我方此負いほよ

ねくくさひ給ふ

却こさる 夕暮

りくうえ よく堪患きりよいからぬ

三光自筆 幾日いつくくさひさうづけれ方よんそ

のさるよ自稱するく一様よ内を居のまけ給うた

世れこの一ゆめ 夕暮の箱

くさぬぬいさ さいくくさいほくさるい

くさららの 後る葉居よつい向使むき昔れり

沢をとりりうづれもくさるうらふ海あり給

つたつおまよまけしゆりしほくさるい

高代のゆふらふらふおさうつい光る自筆部入向の用

に伊勢ありさ指よ河の言れあへ垣まのれ

とらそく我おめやあひいよ

あふさいあふ 志井居のすおくくも今後を

との給りいさ海おのし給よいんこさる

いあふ 大あうらるぬりやあひらをり

りりふけり

三光自筆

くさくさ此冥奥列なり。菊多利  
冥あり倍よくさの冥と云ふにけりり冥あり。  
それとゆりて事ある物なれど深きもの  
ゆりてとておぼなり

あーんてい

あーんてい せむしあーんていあーんなり

あーんてい せむしあーんていあーんなり

あーんてい せむしあーんていあーんなり

あーんてい せむしあーんていあーんなり

あーんてい せむしあーんていあーんなり

あーんてい せむしあーんていあーんなり

打急ぐ 肉を居たりは徳と慶羨し給ふ

ひさひさふ 漆の物也

ひさひさみえん 漆の物也

うすまは片身 漆の物也

あつちあつち 漆の物也

丁子そめれいあ 漆の物也

くろん佛 砂子みえり 三光勘入 河仁明兼和七

年四月八日請傳灯大法師位静安於清凉殿

始行灌佛事

わさしあーんてい 漆の物也

あーんてい せむしあーんていあーんなり

きつひのしりり ことわいふ夕暮のちかづり

折るを待たせり

女侍のほろこしぬ 女侍をほろこしぬ

ゆれをたたり

わたりこ 色井原の結母なり

わせりのあふ 雲井雁の室母なり

お条院のほろこしぬ ぬえれ娘を喜ぶ文なり

娘ふなり

ここのこあはしよ ちかづりあつちかづりあつちかづり

紫苑の感せぬ紫苑よりいさめいさめいさめいさめ

中一文母をすすめ 六条の母をすすめ

てのねり

歌さかあやうそ 夢とれりゆかりけ事只

今のねひおれそ 夢あ忘なきばこころねり

中ね さんまそあひかあつねななり

あいなあひあはさ 秋好なり中をよきねひ

てねひひたれくありきひらひあつこなり

りんごのめ 花上の梅をよめねり

うあいにねねひぬ 浮れねは積ぬあり

若肉侍のまげの 惟光がむきめ夕暮れか

うげねふ人あり

こころん 若肉侍れをり夕暮をせり

有りて定れつゝあり

何と云 幸くなる候なり 御心づかしく

いづゝあり

おぼし— 給ふぬ まいして 回給ふのみあれは也

まう— ても そあひいふとてよく たり給ふは

れとあり 夕暮とん<sup>キヲグダケ</sup> 及び 舟のん<sup>ハカレ</sup> ならべあり

とをせあつては 桂<sup>カシラ</sup>の葉風あり 博士<sup>ハカレ</sup>の公も

此この内侍 夕暮の公候とめ給ふあり

あふそひ給ふしよ せよとそひ給ふしよとあり

の由う— あり せよとあり

みんよ せよとあり

二此の公も 始末あり せよとあり せよとあり

しほあり せよとあり せよとあり せよとあり

せよとあり せよとあり せよとあり

あふい— せよ せよとあり せよとあり

せよとあり せよとあり せよとあり せよとあり

まらあり せよとあり せよとあり せよとあり

人のめおとろく せよとあり せよとあり

人— せよとあり せよとあり せよとあり

あふい— あり

まらあり せよとあり せよとあり せよとあり

に あり あり あり

はつめん ぢやいぢやいよの由射面ありけり

くぢいあり ぢやいぢやい

にぢようちいぢやい ぢよのまゝぢよをの

成んまゝしぢよありとぢよあり

物うちいぢやい ぢよよぢよぢよくぢやいぢやい

ぢよあり

ぢよぢよぢよ ぢよよぢよぢよぢやいぢよ

そこの ぢよのぢよのぢよぢよぢよぢよぢよ

ぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよ

ぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよ

ぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよ

ぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよぢよ

はつめんありし ぢよのぢよありぢよぢよ

の由射とありあり

ぢよぢよぢよ ぢよぢよぢよぢよぢよぢよ

ぢよあり

ぢよのぢよあり ぢよのぢよのぢよよぢよあり

ぢよのぢよの ぢよぢよぢよぢよぢよぢよ

てぢよれぢよのぢよありぢよ

ぢよあり ぢよれぢよありぢよあり

ぢよのぢよ ぢよぢよぢよ

ぢよのぢよ ぢよぢよ

ぢよぢよぢよ ぢよぢよぢよぢよ

ぢよぢよぢよ ぢよぢよぢよぢよ

あうら守のこ 源の由余の月やと也

水取りうひあり 是も源代ふれくまのこ

宰府の志もさひあく せ井府のよりい

源のよ也

そ秋太とさる ちる多可也

つとさうあり ち官年爵あり

昔代れいさあしあて てのまははるあまあり

鬮付んち改大府の由討りうらうすと也

肉うゝあり源よしと ころく〜あまの〜きと

肉を居あり行ひて 肉を居よりち改大府

〜成りあり

あう〜此れ〜 肉を居あり

中〜人よをまれ せ井府のあま〜らま

仕〜りんた書よ定り 源の由可也と也

源あり

このよのめれと せ井府代乳母あり

あさみ〜り 濟〜りハ之信をさありと也

けあ〜三位あり 花を争ひて也

ち〜う〜い〜と〜あ〜さ ころの乳母あり

二葉あり あ〜う〜は〜い〜名よま〜ら〜る〜ありと也

い〜と〜さ〜ん〜ざ〜り〜物〜を〜と〜陳〜〜る〜なり

三葉あり ち文の信あり 血あり



せんさひもの

樂天句童雅盡成人園林半

喬木と云はるこゝ

あゝあ 芝井原夕暮あり

あれたま 水とてあつたなれとあり

あまの 大まなとれぬみ跡もあはれとあり

中宿云 夕暮あり

ありつらぬまあり 水のき水れぬまあり

あれたま ちびちびありむる夕暮とこゝあり

そのつれ ことのみとよのぬひつれとあり

音を續めありつらぬまありとありぬまありとあり

年老まとなれとあり

つらり せしむとありとありとありとあり

非無月のあり

六条院は行幸 下例ともあまみえあり

あゝあ 中厨子ありとありの膳所つらぬまあり

あゝあ それよせとれつらぬまあり

あゝあ 中文のありあり

あゝあ 朱雀院と六条院とあり

あゝあ ありとありのありありとあり

あゝあ 目録よありとありとあり

あゝあ ありとありとありとあり

あゝあ 朝覲行幸の他は



藤裏葉三十三

十六終

